

青少年の広域事業としての合同キャンプの評価 —冒険、体験、いじめ根絶のための連続キャンプ—

諫山邦子¹・奥山 洌²・加藤敏之²・森 敏隆³

¹北海道教育大学釧路校学校教育講座教幼児教育 ²北海道教育大学釧路校学校教育講座教育心理学
³釧路市教育委員会

Evaluation of the joint camp for the early adolescent

Kuniko ISAYAMA¹, Kiyoshi OKUYAMA², Toshiyuki KATO² and Tositaka MORI³

¹Department of Preschool Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

²Department of Educational Psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

³Board of Education, City of Kushiro, Kushiro 085-8505, Japan

Summary

The Purpose of this study was to assess the benefit of a joint camp with the following three factors: 1) changes of self-concept in early adolescent, 2) operational and administrative view points, and 3) self-esteem of each group leader in the camp.

The camp had two courses --- one was a 3-day camping for 4th grade children, promoted by the Education Bureau, and another was a 6-day camping for 5th and 6th grade children, promoted by the Board of Education.

The following results were obtained:

- 1) Statistical differences before and after the camping experience were found in 5 out of 29 self-concept scales in 4th grade children, and 5 out of 29 self-concept scales in 5th and 6th grade children.
- 2) In selecting the areas and facilities, appropriate decisions were made regarding camping activities.
- 3) Organizational and administrative problem arose in the planning of two courses and leader training, respectively.

はじめに

自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称としての野外教育は、青少年の健全育成のための効果的な教育方法の一つとして期待されている。^{1) 2)} 社会教育の立場からも青少年の野外教育振興のために、地方自治体が多様な取り組みを行ってきているが、釧路管内 10 市町村における広域行政の活性化のために、1998 年度には釧路市教育委員会と釧路教育局が、それぞれ独自に計画していた広域青少年事業を連続させ一本化して実施する試みを行った。

本研究は、1) 同事業への参加者の自己概念の変容、2) 指導にあたったスタッフ・班指導者による同事業全体と個別プログラムについての評価、3) 班指導者の自己評価、の 3 つについて、それらを分析・検討することにより、今後の合同広域事業の展開、および指導者養成に資することを目的とする。

方法

広域事業のプログラム

青少年プログラム：森林トレッキング・登山を中心とした前半部と、屋内外での体験学習・カヌー活動・討論会を中心とした後半部の 2 つからなり、小学 5・6 年生はこれら全体に参加し、小学 4 年生は後半（カヌー活動を除く）に限って参加した。

活動期間は、1998 年 8 月 3 日-8 日、5 泊 6 日（小学 5・6 年生）、および、8 月 6 日-8 日、2 泊 3 日（小学 4 年生）、活動場所は、阿寒ランド丹頂の里・雄阿寒岳・雄阿寒岳山麓森林地帯（前半部）、および、厚岸少年自然の家とその周辺・厚岸湖と別寒辺牛川（後半部）であった。日程を図-1 に示す。

本プログラムは、前半が冒険的プログラムであり、後半が討論を含む体験学習のプログラムとなっている。

指導者養成のプログラム： 班指導者の大学生と中高生を

第1日目 8月3日(月) 阿寒ランド丹頂の里(テント泊)

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00

				受開 会 付式	仲 間 ゲ 作 り ム	野外炊飯活動	班 活 動	入 浴	指 導 就 者 会 寝 議
--	--	--	--	---------------	----------------------------	--------	-------------	--------	---------------------------------

第2日目 8月4日(火) 阿寒ランド丹頂の里(テント泊)

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00

起 床 ・ 準 備	朝 食	後 片 づ け	森の中で遊ぼう			バ ス 移 動	つ タ ど い 食	入 浴	自 由	指 導 就 者 会 寝 議
-----------------------	--------	------------------	---------	--	--	------------------	-----------------------	--------	--------	---------------------------------

第3日目 8月5日(水) ネイバル厚岸泊

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00

起 床 ・ 準 備	朝 食	バ ス 移 動	雄阿寒岳登山			バ ス 移 動	タ 食	入 浴	自 由	指 導 就 者 会 寝 議
-----------------------	--------	------------------	--------	--	--	------------------	--------	--------	--------	---------------------------------

第4日目 8月6日(木) ネイバル厚岸泊

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00

起 床 ・ 準 備	朝 食	後 荷 片 物 整 付 理	カヌー 基礎体験	受 付	昼 食	開 式 ・ 対 面	遊々ランド 「昔の遊びを 知ろう」	つ タ ど い 食	自 由 時 間	ふるさと 文化講演会 「自分達の 町を 学ぼう」	指 導 就 者 会 寝 議
-----------------------	--------	---------------------------------	-------------	--------	--------	-----------------------	-------------------------	-----------------------	------------------	--------------------------------------	---------------------------------

第5日目 8月7日(金) ネイバル厚岸泊

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00

起 床 ・ 準 備	朝 の つ ど い	清 掃	朝 食	ボランティア活動 アイスクリーム実習体験 カヌー川下り体験(5、6年)			つ タ ど い 食	自 由 時 間	い じ め 根 絶 討 論 会	指 導 就 者 会 寝 議
-----------------------	-----------------------	--------	--------	---	--	--	-----------------------	------------------	--------------------------------------	---------------------------------

第6日目 8月8日(土)

6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00

起 床 ・ 片 付	朝 の つ ど い	清 掃	朝 食	ふるさと ウォークラリー	閉 会 式	昼 食
-----------------------	-----------------------	--------	--------	-----------------	-------------	--------

Adventureスクール

TAGE倶楽部

図-1. 日程

表-1. 調査対象者

	ティーンエイジ クラブ参加者		アドベンチャー スクール参加者		アドベンチャー スクールスタッフ		合計
	小学4年	小学5年	小学6年	大学生	教員等		
男	24	9	9	4	2		48
女	15	13	16	5	1		50
合計	39	22	25	9	3		98

対象とし、3回の研修を位置づけた。第1研修として、7月12日、日帰りの雄阿寒岳周辺トレッキング、第2研修として、7月19日-20日、1泊2日でのカヌーの基礎実技実習と別寒辺牛川下りを行い、最後に第3研修として8月3日-8日の事業を配した。

調査対象

自己概念検査は、上述のプログラムに参加した小学4・5・6年生を調査対象とした。事業の評価は、スタッフ3名、班指導者（大学生）9名、計12名を分析の対象とし、班指導者（大学生）の自己評価は、9名のうち8名を分析の対象とした。内訳を表-1に示す。

検査および手続き

自己概念検査は、独自に開発した29項目からなる調査票を用いた。回答の形式は、「非常にあてはまる」、「あてはまる」、「どちらでもない」、「あてはまらない」、および「全くあてはまらない」のいずれかを選択する5件法であった。5・6年生に対しては第1日目である8月3日の開会式直前（以下事前）、8月6日の対面式直前（以下

事中）、および最終日である8月8日の閉会式直後（以下事後）のそれぞれの時点で記入を求めた。4年生に対しては第1日目である8月6日の対面式直前（以下事前）、最終日である8月8日の閉会式直後（以下事後）のそれぞれの時点で記入を求めた。

事業評定票は、アメリカ・キャンプ協会のキャンプ・スタンダード³⁾を参考に作成した。概括した事業評価は、4領域37項目から構成されており、さらに、個別プログラムの評価をみるために20項目を置いた。これらは、3.5点を平均とする6点満点の6段階評価とした。加えて、宿泊日数の適否についての意見も求めた。調査票の記入は、事後に行われた。

班指導者の自己評価は、井村の調査⁴⁾を参考に作成した。8項目についてそれぞれ、重視して準備したり努力したことと、今後強化する努力をしたい能力について、3.5点を平均とする6点満点の6段階評価とした。井村によれば、「7つの項目は、5か国の野外活動指導者養成について比較調査をした研究において、望ましい野外活動指導者の諸特性のひとつとして挙げられている」としている。その7項目に「児童の理解」という項目を加えて、8項目について事後に記入を求めた。

結果と考察

4・5・6年生の自己概念調査

表-2. 自己概念の変化-5.6年生 平均（標準偏差）

注：全29項目のうち、有意差のあるもののみを示す。

項 目	男子 (n=18)			女子 (n=29)			変 性 化 差	交 互 作 用
	事前	事中	事後	事前	事中	事後		
2 人よりおどっていると感じる ことがある	2.38 (0.86)	2.75 (0.75)	3.13 (1.11)	2.73 (0.94)	2.92 (1.00)	2.88 (0.93)	+	
14 自分のことばかり考えている ほうである	2.88 (1.17)	2.50 (1.00)	2.75 (0.97)	2.65 (0.68)	2.46 (0.84)	2.69 (0.82)	+	
16 困っている友達を助ける ほうである	3.69 (0.92)	3.56 (1.00)	3.88 (0.99)	4.00 (0.78)	3.77 (1.09)	4.23 (0.85)	*	
20 今、やらなければならない ことがわかっている	3.25 (1.39)	3.13 (1.36)	2.88 (1.17)	3.62 (1.08)	3.81 (1.11)	4.04 (0.98)		*
22 今のままの自分では いけないと思っている	3.06 (0.97)	3.50 (1.17)	3.88 (1.11)	3.69 (0.95)	3.31 (1.03)	3.31 (1.10)		*
23 今いる学校または地域を 変えたいと思っている	2.19 (1.51)	2.81 (1.38)	2.44 (1.37)	2.44 (1.30)	2.72 (1.40)	2.48 (1.33)	+	
24 人よりすぐれていると思う	2.75 (1.25)	2.81 (1.13)	2.94 (0.97)	2.54 (0.96)	2.71 (0.79)	2.96 (0.73)	+	
29 考えるより、まず行動する ほうである	3.81 (1.13)	3.25 (1.35)	3.56 (1.22)	3.38 (1.00)	3.50 (1.15)	3.42 (1.28)		+

+: .05<p<.10 * : p<.05

表-3. 自己概念の変化—4年生 平均(標準偏差)

注: 全29項目のうち、有意差のあるもののみを示す。

項 目	男子 (n=24)		女子 (n=15)		変 性 交互 化 差 作用
	事前	事後	事前	事後	
3 自分を頼りないと感じることがある	3.00 (1.09)	2.73 (1.05)	3.00 (0.93)	3.64 (0.61)	*
4 自分には生きがいのある未来が待っていると思う	3.36 (1.15)	3.23 (1.28)	2.93 (0.88)	3.43 (1.05)	+
7 手がけたことは全力をつくしたい	3.90 (0.92)	3.71 (1.31)	3.27 (1.00)	3.73 (0.93)	+
8 自分はいろいろな人達に支えられて生きていていると思う	3.23 (1.08)	3.77 (1.13)	3.73 (1.00)	3.80 (0.75)	+
9 自分は自然と一緒に生きていていると思う	3.55 (0.94)	3.73 (0.91)	3.79 (0.86)	4.14 (0.74)	+
16 困っている友達を助けるほうである	3.42 (1.04)	3.71 (0.84)	3.71 (0.88)	4.14 (0.74)	*
22 今のままの自分ではいけないと思っている	3.23 (1.17)	3.50 (1.23)	2.79 (1.21)	3.57 (1.24)	*
27 一人でも生きていけると思う	2.86 (1.14)	3.55 (1.08)	3.07 (1.53)	2.86 (1.25)	+
28 楽しいこと、やりたいことをいつも探している	3.52 (1.06)	3.87 (1.08)	3.15 (0.86)	3.54 (1.01)	+

+: .05<p<.10 * : p<.05

選択された「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までのそれぞれに、5点から1点までの値を与えた。平均(標準偏差)を小学5・6年生については表2に、小学4年生については表3にそれぞれ示す5)。これらを計算ソフトSPSSを用いて、小学5・6年生は変化(事前・事中・事後)×性(男子・女子)、小学4年生は変化(事前・事後)×性(男子・女子)の2要因混合計画分散分析により処理を行った。多重比較は最少有意差法により行った。

1) 事前・事中・事後(小学5・6年生)の比較

第2項「人より劣っていると感じる」とにおいて、変化に傾向としての差がみられた($F(2,80)=2.9, .05<p<.10$)。多重比較の結果、事前<事後であった($MSe=0.71, p<.05$)。第14項「自分のことばかり考えているほうである」において、変化に傾向としての差がみられた($F(2,80)=2.46, .05<p<.10$)。多重比較の結果、事前>事中であった($MSe=0.38, p<.05$)。第16項「困っている友達を助けるほうである」において、変化に有意差がみられた($F(2,80)=4.74, p<.05$)。多重比較の結果、事中<事後であった($MSe=0.31, p<.05$)。第20項「今、やらなければならないことがわかっている」において、有意な性差がみられ、男子<女子であった($F(1,40)=$

6.10, $p<.05$)。第22項「今のままの自分ではいけない思っている」において、変化と性の有意な交互作用がみられた($F(2,80)=4.32, p<.05$)。単純主効果をみると、男子事前<女子事前($F(1,40)=3.92, p<.05$)、男子事前<男子事後であった($MSe=0.86, p<.05$)。第23項「今いる学校や地域を変えたいと思っている」において、変化に傾向としての差がみられた($F(2,78)=2.95, .05<p<.10$)。多重比較の結果、事前<事中であった($MSe=0.71, p<.05$)。第24項「人よりすぐれていると思う」において、変化に傾向としての差がみられた($F(2,76)=2.65, .05<p<.10$)。多重比較の結果、事前<事後であった($MSe=0.34, p<.05$)。第29項「考えるより、まず行動するほうである」において、変化と性の交互作用が傾向としてみられた($F(2,80)=2.42, .05<p<.10$)。単純主効果をみると、男子事前>男子事中であった($MSe=0.47, p<.05$)。

これらの結果は相互にほぼ整合性があり、「自分のことばかり考えているほうである」が事前より事中にかけて負の変化を示し「困っている友達を助けるほうである」が事中より事後にかけて、また「今いる学校や地域を変えたいと思っている」が事前より事中にかけて正の変化を示していることは、プログラムに参加した子どもの向社会性に関わる自己概念に、肯定的な変化を生じたこと

を意味する。また、男子が事前から事後に欠けて「今のままの自分ではいけないと思っている」において正の変化を示し、同じく男子が事前から事中にかけて「考えるより、まず行動するほうである」において負の変化を示したことは、これらの子どもの自己認識や状況の認識にかかわる自己概念に、肯定的な変化を示したことを意味する。しかし、事前から事後にかけての「人より劣っていると感じることもある」において正の変化が生じた一方で、「人よりすぐれていると思う」でも正の変化が示された。そこで、この2つの項目について、事後の値の相関係数をみると、 $r=-.17$ ($.10 < p$) となり有意ではなかった。したがって見かけ上両義的な結果をもたらしたこのような変化は、同一個人の子どもにおいて生じたものではなく、自己への信頼を強めたものと弱めた者のいたことを示唆している。

2) 事前・事後(小学4年生)の比較

第3項「自分を頼りないと感じることがある」において、変化と性の有意な交互作用がみられた ($F(1,34)=5.35, p < .05$)。単純主効果では、男子事後 < 女子事後 ($F(1,34)=8.24, p < .01$)、および女子事前 < 女子事後 ($F(1,34)=5.28, p < .05$) が有意であった。第4項「自分には生きがいのある未来が待っていると思う」において、変化と性の交互作用に差の傾向がみられた ($F(1,34)=3.26, .05 < p < .10$)。単純主効果では、女子事前 < 女子事後という差の傾向がみられた ($F(1,34)=4.03, .05 < p < .10$)。第7項「手がけたことは全力をつくしたい」において、変化と性の交互作用に差の傾向がみられた ($F(1,35)=3.05, .05 < p < .10$)。単純主効果では、女子事前 < 女子事後という差の傾向がみられた ($F(1,34)=3.50, .05 < p < .10$)。第8項「自分はいろいろな人達に支えられて生きていると思う」において、事前 < 事後という差の傾向がみられた ($F(1,35)=3.05, .05 < p < .10$)。第9項「自分は自然と一緒に生きていると思う」において、事前 < 事後という差の傾向がみられた ($F(1,35)=2.97, .05 < p < .10$)。第16項「困っている友達を助けるほうである」において、事前 < 事後という有意差がみられた ($F(1,36)=5.43, p < .05$)。第22項「今のままの自分ではいけないと思っている」において、事前 < 事後という有意差がみられた ($F(1,34)=5.20, p < .05$)。第27項「一人でも生きていけると思う」において、変化と性の交互作用に差の傾向がみられた ($F(1,35)=3.05, .05 < p < .10$)。単純主効果において、男子事後 > 女子事後 ($F(1,34)=2.92, .05 < p < .10$)、および男子事前 < 男子事後 ($F(1,34)=3.98, .05 < p < .10$) という差の傾向がみられた。

第28項「楽しいことやりたいことをいつも探している」において、事前 < 事後という差の傾向がみられた ($F(1,34)=3.42, .05 < p < .10$)。

これらの結果も相互にほぼ整合性があり、女子の「自分には生きがいのある未来が待っていると思う」、「手がけたことは全力をつくしたい」、および全体としての「今のままの自分ではいけないと思っている」、「楽しいことやりたいことをいつも探している」における正の変化は、プログラムに参加した子どもの将来展望や積極的行動への志向にかかわる自己概念に、肯定的な変化を生じたことを意味する。また、「自分はいろいろな人達に支えられて生きていると思う」、「自分は自然と一緒に生きていると思う」、および「困っている友達を助けるほうである」における正の変化は他者との連帯や向社会性にかかわる自己概念に、肯定的な変化が生じたことを意味する。しかし、女子では、自己への信頼が弱まったことを意味する「自分を頼りないと感じることがある」における正の変化がみられた。他方男子では、これとは逆の意味を持つ「一人でも生きていけると思う」において正の変化を示した。

スタッフによる事業評定

スタッフによる事業の評価をみるための37項目(表-4)は、「活動地域・施設」7項目、「管理・運営」11項目、「指導者」8項目、「プログラム」11項目、の各領域ごとに分散分析を行った。個別プログラムの評価をみるための20項目(表-6)は、プログラムの効果についての10項目、事前準備の10項目にわけ、それぞれについて分散分析を行った。

1) 事業全体の評定

「活動地域・施設」に関する評価に項目間の有意差がみられた ($F(6,66)=4.07, p < .01$)。多重比較の結果 ($MSE=0.86, p < .05$) を表-5.1に示す。評価が高かったものは、活動が展開された場所の自然環境やその活用に関する項目で、全般的な状況であり、評価の低かったものは具体的イメージが伴っている。事業のねらいの一つに管内の教材化された自然(地域素材)に充分接する活動があげられているが、本事業では阿寒町・厚岸町の地域素材が充分活用されていたことが示されたものである。これらは、標準偏差も比較的小さく、一定した評価でもあった。また、野外教育活動を行っていく上で最も重要な基本事項としての安全管理に関しては、平均を上回ってはいたが、さらに、周知への詳細な配慮が望まれると

表-4. スタッフによる事業の評価

注：6点満点で評定した結果である。

項 目	平均	標準偏差	人数
活動地域・施設に関する評価			
1. 活動区域内の危険区域について参加者及びスタッフに周知徹底されていましたが	4.25	(1.29)	12
2. 予測可能な事故等に対する危機管理はよかったですか	4.83	(1.11)	12
3. 活動を展開した場所は豊かな自然資源が確保されていたと思いますか	5.33	(1.15)	12
4. 活動を展開した場所の自然環境を活用していたと思いますか	5.50	(0.67)	12
5. 活動場所の飲料水などの水質検査状況はよかったですか	4.08	(1.00)	12
6. 宿泊施設の周囲の環境はよかったですか	5.08	(0.67)	12
7. 保健・衛生の手続き（トイレ・洗面所・炊事場など）はよかったですか	4.50	(1.00)	12
管理・運営に関する評価			
8. Adventure-school 事業の目標は明確であったと思いますか	4.17	(1.19)	12
9. 目標はスタッフに周知徹底されていたと思いますか	3.58	(1.56)	12
10. 自然保護のための対策と指導を行ったと思いますか	4.27	(1.01)	11
11. 保護者とのコミュニケーション（説明会、報告書など）を確保していたと思いますか	4.17	(1.34)	12
12. スタッフの職務分担と各プログラムでの役割は明確であったと思いますか	4.00	(1.35)	12
13. スタッフの分担業務は適切に行われていたと思いますか	3.92	(1.51)	12
14. 毎日スタッフ会議を実施してスタッフ間の交流を図っていたと思いますか	5.08	(0.90)	12
15. 事業期間中、スタッフの休養・自由時間は適切だったと思いますか	4.08	(1.51)	12
16. Adventure-school 事業の組織だった評価を行っていたと思いますか	4.25	(0.97)	12
17. 食料計画と食料担当者への衛生指導はなされていたと思いますか	4.00	(1.65)	12
18. 用具の手入れと保管、及びその指導はよくなされていたと思いますか	4.83	(0.58)	12
指導者に関する評価			
19. 班指導者の年齢構成は適切であったと思いますか	5.17	(0.72)	12
20. 班指導者 1 名に対するキャンパーの割合は適切だったと思いますか	5.00	(1.13)	12
21. 班指導者の指導は満足のいくものだったと思いますか	4.17	(1.59)	12
22. 班指導者の事前トレーニングはよくできたと思いますか	4.17	(1.34)	12
23. 指導責任者は、この主の活動の指導経験が豊富で、専門性を備えていたと思いますか	4.67	(1.50)	12
24. 計画段階からスタッフ（班指導者を除く）がよく関与していたと思いますか	4.50	(1.09)	12
25. スタッフ（班指導者を除く）は活動を展開する上で、専門性を備えていたと思いますか	5.08	(1.00)	12
26. スタッフ（班指導者を除く）の事前トレーニングはよくできたと思いますか	4.75	(1.22)	12
プログラムに関する評価			
27. 天候の急変などに対応できる柔軟なプログラムだったと思いますか	5.00	(1.13)	12
28. 社会性を育てるような配慮を行っていたと思いますか	4.58	(1.00)	12
29. グループの協力や個人差について理解できる機会を設けていたと思いますか	3.88	(1.35)	12
30. 参加者の異なる知識・技術・経験に対応した内容だったと思いますか	4.33	(0.78)	12
31. プログラムは、個人活動、グループ活動、全体活動の配分を考慮していたと思いますか	3.75	(1.42)	12
32. 参加者の自主的活動の場を確保していたと思いますか	4.00	(1.35)	12
33. 自然環境について理解する機会を設けていたと思いますか	4.50	(1.38)	12
34. 参加者の冒険欲求を満たすことができましたか	4.58	(1.24)	12
35. 単に技術だけを教えるのではなく発展性を持たせるように理解させていたと思いますか	3.83	(0.83)	12
36. 食事メニューは変化に富み、適切な内容だったと思いますか	2.50	(1.31)	12
37. Adventure-school 事業は期待通り満足した内容だったと思いますか	4.17	(0.72)	12

表-5.1. 多重比較 (活動地域・施設に関する評価)

項目	平均	項目番号			
		5	1	7	2
5. 水質検査状況	4.08				
1. 危険区域の周知	4.25				
7. 保健・衛生	4.50				
2. 危機管理	4.83				
6. 周囲の環境	5.08	*	*		
3. 豊かな自然資源	5.33	*	*	*	
4. 自然環境の活用	5.50	*	*	*	

* : p<.05

表-5.2. 多重比較 (管理・運営に関する評価)

項目	平均	項目番号							
		9	13	12	15	11	8	16	17
9. 事業目標の周知	3.58								
13. 分担業務の実行	3.92								
12. 職務分担の明確化	4.00								
15. スタッフの休養	4.08								
11. 保級者とのコミュニケーション	4.17								
8. 事業目標の明確化	4.17								
16. 事業の組織的評価	4.25								
17. 食料計画と衛生指導	4.00								
10. 自然保護の対策	4.27								
14. スタッフ間の交流	5.08	*	*	*	*	*	*	*	*
18. 用具の手入れ	4.83	*	*	*	*	*	*	*	*

* : p<.05

表-5.3. 多重比較 (指導者に関する評価)

項目	平均	項目番号				
		22	21	24	23	26
22. 班指導者の事前トレーニング	4.17					
21. 班指導者の指導	4.17					
24. 計画段階でのスタッフの関与	4.50					
23. 指導責任者の専門性	4.67					
26. スタッフの事前トレーニング	4.75					
20. 班指導者とキャンパーの人数の割合	5.00	*	*			
25. スタッフの専門性	5.08	*	*			
19. 班指導者の年齢構成	5.17	*	*			

* : p<.05

表-5.4. 多重比較 (プログラムに関する評価)

項目	平均	項目番号							
		36	31	35	29	32	37	30	33
36. 食事メニュー	2.50								
31. 活動形態の配分	3.75	*							
35. 発展性についての理解	3.83	*							
29. グループの協力や個人差への理解	3.88	*							
32. 参加者の自主的活動	4.00	*							
37. 事業全体の満足度	4.17	*							
30. 個人差への対応	4.33	*							
33. 自然環境への理解	4.50	*							
34. 冒険欲求への対応	4.58	*	*						
28. 社会性への配慮	4.58	*	*						
27. 天候急変への対応	5.00	*	*	*	*	*	*	*	*

* : p<.05

ころである。4 領域のうち、全体として本領域の評価が一番高かった。

「管理・運営」に関する評価に項目間の有意差がみられた (F(10,100)=2.07,p<.05)。多重比較の結果 (MSe=1.11,p<.05) を表-5.2 に示す。評価の高かったものは、スタッフ同士の交流と用具の手入れの項目であった。面識の浅いスタッフ同士のコミュニケーションを図るためにコーディネーターが重視しており、その意図が充分発揮されていたといえる。後者については、一般的な野外教育活動で煩雑になりがちな用具の扱いを極力少なくし、合理的な運営を行っていたことを現すものである。低かったものとして分離されたのは、事業目標や業務負担にかかわる総括的項目であった。本事業が教育委員会と教育局が独自に進めてきた計画を日程的に組み合わせたことで、それぞれの目標や運営方針が統一できず、さらにそのような中で、業務分担が有効に機能できなかったことを示しているものと考えられる。

「指導者」に関する評価に項目間の有意差がみられた (F(7,77)=2.22,p<.05)。多重比較の結果 (MSe=0.82,p<.05) を表-5.3 に示す。評価の高かったものは、スタッフの専門性、班指導者の年齢構成や対キャンパーの人数比であったことが高い評価につながったものと考えられる。班指導者 1 名の下に、中・高生 1-2 名のサブリーダーのを配した班指導体制に、キャンパーが 6-10 名のグループ編成は、よい評価を得たといえる。低かったものとして分離されたのは班指導者の事前研修や班指導であった。前述した第 1 研修や第 2 研修は事前研修にあたるが、一部の班指導者が参加できたのみである。今後、青少年プログラムに子ども達と直接の指導者として、かかわる前の事前研修を何らかの形で充実していかなければならないことを示唆している。班指導者の指導に関しては、標準偏差の値が大きく指導力量の差があったことが伺える。

「プログラム」に関する評価に項目間の有意差がみられた (F(10,110)=5.97,p<.01)。多重比較の結果 (MSe=0.87,p<.05) を表-5.4 に示す。食事メニューが、他の項目と分離された。天候への対応や参加者の冒険要求や社会性への配慮が比較的高い評価を得ている。全ての個別プログラムについて、徹底した雨天時への対策をとっていたことを、スタッフが共通理解していたことが示されている。参加者の冒険的欲求を充足したり、社会性を育てるための配慮については、組織的・計画的に自然体験活動をプログラムに取り入れていることが背景にあったと

表-6. スタッフによる個別プログラムの評価

注：6点満点で評定した結果である。

項目	平均	標準偏差	人数
1. 仲間づくり野外ゲーム：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	4.60	(1.26)	10
事前準備は充分だったと思いますか	4.10	(1.20)	10
2. 野外炊飯活動：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	2.80	(1.48)	10
事前準備は充分だったと思いますか	2.70	(1.34)	10
3. 森林トレッキング：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	3.80	(1.55)	10
事前準備は充分だったと思いますか	4.20	(1.55)	10
4. 雌阿寒岳登山：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	5.30	(1.25)	10
事前準備は充分だったと思いますか	4.60	(1.26)	10
5. カヌー基礎体験：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	5.25	(0.87)	12
事前準備は充分だったと思いますか	4.92	(1.31)	12
6. 昔の遊びを知ろう：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	4.58	(1.24)	12
事前準備は充分だったと思いますか	4.00	(1.21)	12
7. ふるさと文化講演会：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	3.25	(0.87)	12
事前準備は充分だったと思いますか	3.25	(0.97)	12
8. カヌー別荘辺牛川下り：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	5.50	(0.67)	12
事前準備は充分だったと思いますか	5.50	(0.67)	12
9. 8月7日夜の話し合い：効果のあるよいプログラムだったと思いますか	2.08	(1.44)	12
事前準備は充分だったと思いますか	2.00	(1.28)	12
10. ウォークラリー：効果のあるよいプログラムだったと思います	3.67	(1.15)	12
事前準備は充分だったと思いますか	3.58	(1.51)	12

推察される。低かったのは、食事メニュー、活動形態の配分、発展性への理解であった。特に前半の給食は、おにぎり 2 けのみ等、青少年の嗜好と食欲を充足するものではなかった。また、活動形態、発展性にかかわっては、前述したように、教育委員会と教育局がそれぞれに進めてきた計画を日程的にあわせたことで、特に 5 泊 6 日の流れが分断されてしまったことの反映であったと考えられる。

2) 個別プログラムの評価

「個別プログラムの効果」についての評価に項目間の有意差がみられた (F(9,81)=9.63, p<.01)。多重比較の結果

(MSe=1.28, p<.05) を表-7.1 に示す。冒険的なカヌー・登山のプログラムが、半数のプログラムと分離している。

「事前準備」についての評価に項目間の有意差がみられた (F(9,81)=10.49, p<.01)。多重比較の結果 (MSe=1.11, p<.05) を表-7.2 に示す。カヌープログラムが、多くのプログラムと分離されている。

効果の評価が高かったものは、カヌーと登山であり、双方とも冒険的プログラムとして配置されているものである。カヌーについては標準偏差が小さくどのスタッフも高い評価を行っている。登山では、標準偏差が大きく、スタッフによって評価に違いがみられる。

表-7.1. 多重比較 (個別プログラムの効果に関する評価)

項目	平均	項目番号									
		9	2	7	3	10	6	1	5	4	8
9.8月7日夜の話し合い	2.08										
2. 野外炊飯活動	2.80										
7. ふるさと文化講演会	3.25										
3. 森林トレッキング	3.80	*									
10. ウォークラリー	3.67	*									
6. 昔の遊びを知ろう	4.58	*	*	*							
1. 仲間づくり野外ゲーム	4.60	*	*	*							
5. カヌー基礎体験	5.25	*	*	*	*	*	*				
4. 雌阿寒岳登山	5.30	*	*	*	*	*	*				
8. カヌー別荘辺牛川下り	5.50	*	*	*	*	*	*				

* : p<.05

表-7.2. 多重比較 (個別プログラムの準備に関する評価)

項目	平均	項目番号									
		9	2	7	10	6	1	3	4	5	8
9.8月7日夜の話し合い	2.20										
2. 野外炊飯活動	2.70										
7. ふるさと文化講演会	3.00										
10. ウォークラリー	3.50	*									
6. 昔の遊びを知ろう	3.70	*	*								
1. 仲間づくり野外ゲーム	4.10	*	*	*							
3. 森林トレッキング	4.20	*	*	*							
4. 雌阿寒岳登山	4.60	*	*	*	*	*					
5. カヌー基礎体験	5.30	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
8. カヌー別荘辺牛川下り	5.50	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

* : p<.05

表-8. 個別プログラムの効果の評価と事前準備の評価の関係

項目	相関係数	検定結果
1. 仲間づくり野外ゲーム	.62	+
2. 野外炊飯活動	.87	**
3. 森林トレッキング	.90	***
4. 雌阿寒岳登山	.22	
5. カヌー基礎体験	.50	+
6. 昔の遊びを知ろう	.43	
7. ふるさと文化講演会	.57	+
8. カヌー別荘辺牛川下り	.20	
9. 8月7日夜の話し合い	.64	*
10. ウォークラリー	.75	**

+ : .05<p<.10 * : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

効果の評価が低かったものは、夜の話し合い、野外炊飯、文化講演であった。いじめ根絶討論会の話し合いは、動機づけしないまま、単にグループに分かれて「学校のことを話し合ってください」という内容だったため、討論が活発に行われなかったという結果をきたし、コーディネーター側の児童への理解や準備の不足という問題があったのではないかと考えられる。野外炊飯は、食材の量が青少年の食欲を充足するには、大いに不適切であったことが影響を及ぼしている。夜の講演は、一日の疲れが出る時間帯なので、特に青少年に興味・関心のある内容でないと効果の期待は難しいと思われる。

表-6 に示した「個別プログラムの効果」についての10個の平均値と「事前の準備」についての10個の平均値間の相関係数を求めると、高い正の相関が得られた ($r=.96, p<.001$)。効果について全体として高い評価を得た個別プログラムは、事前の準備についての全体の評価も高い。そこでその詳細をみるために、個別のプログラム毎に、効果の評定と準備の評定の間の相関係数を求めた(表-8)。この結果をみると、相関係数が有意ではなかった6項目のうちの5項目(第1、4、5、6、8項目)は、効果の評定の上位5位に含まれ、逆に正の相関係数が有意であった4項目(第2、3、9、10項目)は、全てが効果の評定の6位から10位までに含まれる(表-7.1参照)。この分布の偏りは有意である ($p=.0467$)。したがって効果の評価の低い個別プログラムでは、個人のレベルでも効果の評価と準備の評価が一致する傾向にある。

3) 宿泊日数の適否

5泊6日という実施日数について12名のスタッフ中、「このままでよい」とした者6名「期間を長くしたほうがよい」とした者4名、「期間を短くしたほうがよい」とした者1名、「このままでよい」と「期間を長くしたほう

表-9. 班指導者による自己評価

注：6点満点で評定した結果である。

項目	平均	標準偏差	人数
重視して準備したり努力したこと			
組織・管理能力(スタッフ間の人間関係)	5.00	(0.53)	8
指導能力	4.38	(1.19)	8
問題解決能力	4.13	(1.25)	8
集団運営能力	4.25	(1.49)	8
環境理解	4.25	(1.28)	8
野外活動技術	4.75	(0.71)	8
安全技術	4.25	(1.04)	8
児童の理解	4.25	(1.04)	8
今後強化する努力をしたい能力			
組織・管理能力(スタッフ間の人間関係)	5.63	(0.74)	8
指導能力	5.25	(1.39)	8
問題解決能力	5.63	(1.06)	8
集団運営能力	5.38	(1.19)	8
環境理解	5.50	(0.76)	8
野外活動技術	5.75	(0.46)	8
安全技術	6.00	(0.00)	8
児童の理解	5.63	(1.06)	8

がよい」の複数を回答した者1名であった。

班指導者の自己評価

自己評価をみるための16項目(表-9)は、これまでの準備や努力8項目、今後の努力8項目にわけ、それぞれについて1要因被験者内計画の分散分析を行った。計算ソフトはSPSSを用い、多重比較は最少有意差法によった。「これまでの準備や努力」についての評価には、項目間に有意差がみられなかった。また「今後の努力」についての評価にも、項目間に有意差がみられなかった。「これまでの準備や努力」についての8個の平均値と「今後の努力」についての8個の平均値の間の相関係数を求めたが、これも有意ではなかった ($r=.11, 10<p$)。

要約

釧路市教育委員会と釧路教育局の広域合同キャンプについて、参加者の自己概念、スタッフの事業評価、および班指導者の自己評価の3つの検討をおこなった。1) 自己概念検査では、5・6年生の向社会性にかかわる自己概念に肯定的な変化を生じた。また、自己への信頼を強めたものと弱めたものがいたことが示唆された。4年生では、将来展望や積極的行動への志向にかかわる自己概念、他者との連帯や向社会性にかかわる自己概念に肯定的な変化を生じた。2) スタッフによる事業評価では、地域素材が充分活用され、スタッフ間の交流が図られ、ス

スタッフの専門性も生かされ、班内の人員組織は適切で、天候への対応も充分であった。一方、班指導者の事前研修が不十分であり、前半の食事メニューに問題点があったことが示唆された。さらに、2つの事業をうまく融合できなかったために、事業目標や業務分担が明確にならず、適切に機能できなかったことが指摘された。今後の合同事業においては、この点が大きな課題であろう。個別プログラムの効果に関しては、カヌー・登山が高く、討論会の評価が低かった。3) 班指導者の自己評価では、有効な分析結果が得られなかった。ただし、事前の指導者研修の充実と適正配置がのぞまれるところである。

参考・引用文献

- 1) 文部省 (1996) 第15回中央教育審議会第1次答申
- 2) 青少年の野外教育の振興に関する調査協力者会議 (1996) 青少年の野外教育の充実について,文部省,9 -10
- 3) American Camping Association (1980) Camp Standards with Interpretations for the Accreditation of Organized Camps, American Camping Association.
- 4) 井村仁 他 (1991) フロンティア・アドベンチャー事業に関する評価研究,筑波大学体育科学系紀要 14, 99-112
- 5) 詳細な自己概念調査票の29項目は、「諫山邦子・奥山洌・加藤敏之・森敏隆 (1998) 冒険教育プログラムと参加者の自己概念の変容, 環境教育研究 1(1), 103.」に掲載されている。